

第二言語習得に関する概観

—中日二言語を中心に—

李 美 静*

0. 問題

国際化にともない、二つの異なる言語を使用する人口が急速に増えている。世界には約6000の言語があると言われているが、国の数としては約200程度しかない。とすると、1国あたり30の言語があるということになる。無論こんな単純にはいかないが、一つの国で複数の言語が使われている多言語社会は実は珍しいことではないのである。

このような状況下で、日本に居る外国人子女や帰国子女の言語教育に使用される言語の割合は、日本語を除いて、中国語、スペイン語、英語の順となっている。中でも、中国語は1/4にも達している（外国人子女教育のための資料便覧, 1995）。また、文部科学省の学校現場における「日本語教育が必要な外国人児童・生徒」の母語の平成九年度の調査では高校生について中国語が圧倒的に多く、全体の70%前後を占めている。

Oller & Perkinsら（1978）は、子どもの総合的な能力は言語能力の総合的な要素に関連があると論じている。また、言語理解は子どもの知的発達的主要因素の一つであるといわれている（村田, 1968; Foss & Hakes, 1978）。1920年代から1960年代はじめまでの初期の研究では、二言語併用が思考に有害と考えられた（e.g., Mclaughlin, 1978）。子どもたちは、二言語を併用することによって、知的に遅れがある、あるいは学業成績が単一言語使用の子どもたちに比べ低いと言った内容が数多く報告されている。二言語習得のメカニズムを解明することは社会的、教育的、個人にとって重要であろう。しかし最近の研究では、むしろ二言語併用が認知発達に利点をもつ可能性があるという知見もある（Bialystok, 1984 ; Bialystok & Ryan, 1985）。Cummins（1978a）, Hakuta（1986）は、多数の研究では二言語併用の子どもたちが言語学的により大きい感受性を持ち、単一言語を習得する子どもよりも思考が柔軟であるかもしれないと報告した。また、二言語併用環境で成長すること自体は、第一言語・第二言語が共に高度に発達すれば、学力や言語、知能面の発達に支障をきたすことはない。それどころか、メタ言語能力、学力、知力などを促進させる作用もあると述べている（Bialystok, 1984 ; Bialystok & Ryan, 1985）。しかし、二言語とも年齢相応のレベルに達していない場合は二言語不十分になる（Cummins, 1978）。

以上のような観点から、中国語と日本語を併用の子どもの二言語習得のメカニズムを詳細に検討する必要がある。第二言語習得に必要とされる各々の過程を把握し、支援をするのが重要である。しかしこの問題に関する検討は十分とは言えない。

第二言語習得についての研究は70年代に実証的研究が行われて以来、その理論は数十個もの見解があるほど枝分かれしながら多くの課題と取り組んできた。そのデータは未だに英語を初めとするヨーロッパ言語が多い（吉岡, 1999）。しかし日本語を第二言語とする中国語母語話者が増えつつある現在、中国語と日本語の二つの言語に関する二言語併用の研究はまだ少ない。

また、内田（1999）は、日本語、韓国語、中国語やファルシ語など単数と複数を区別しない言語を母語とする第二言語学習者の幼児は複数形の“-s”の脱落が顕著であることを見出していることから、母語の文法が干渉しているものと推測される。特に二つの言語にまたがる能力は、共有部分において互いに影響しあいながら発達することから、言語間の類似性の高い部分を調べるのに、二つの言語の表記形態が同じ表意文字の漢字を使う中国語と日本語を取り上げることは意味があるであろうと考えられる。

本論文は、二言語の習得の研究に関して、中日二言語の研究を主に概観し、実際、中日二言語を習得する際の影響要因を含めて、今後の研究の方向性を提言することを目的とする。第一に、言語能力を測定する方法について先行研究を概観する。第二に、二言語の習得に関して何が大事なのか、またどのような段階でどのような習得や関与要因が

キーワード：中国語、日本語、第二言語習得、追跡調査

*平成10年度生 人間発達科学専攻

見られるのか、そしてどこで誤りを犯しやすいのかの先行研究を概観する。第三に、それぞれ今後の研究の展望について論じる。

1. 第二言語習得

バイリンガリズムを検討する前提として、バイリンガルとは一体どういう人たちを指すのだろうか。またバイリンガルの定義とはどのようなものだろうか。バイリンガリズムはどんな特徴を持っているだろうか。本節では、まずこれらの複雑なことについて概観した後、言語能力の測定の指標について概観する。

1.1. バイリンガルとは

大まかに言うと、バイリンガルとは一人の人間が二つの言語について能力を持っているということである。二言語使用、すなわちバイリンガリズムの定義は幅広く、数多くある。最も狭義と考えられるBloomfield (1933) の定義は「二つの言語を母語話者のようにコントロールできること」である。いわゆる学習者が外国語を母語と区別できないくらい完璧に話すようになるだろう。それに対して、非常に広義な定義 (Haugen, 1953) は「ある言語の話者で、別な言語でも意味のある発話をできる人」であり、極端な例をあげれば、"good" とさえ言えば、誰でもバイリンガルと呼ばれることができる。ここで、中間あたりの位置に近い定義と思われる「二つの言語を使用する能力を持つ人」(Weinreich, 1953) をバイリンガリズム、そして「同一人物によって二つないし、それ以上の言語が交互に使用されること」(Mackey, 1962) を、バイリンガルとする。また、もっとも現実的に言語機能という面に注目した考え方を提唱しているバイリンガル研究者のGrosjean (1982) によると、いろいろな場面で第二言語を使い、どれか一つでも第二言語で目的が達成できれば、その人はバイリンガルである。こうしたバイリンガルの定義は統一されていない中、どのようなものを基準にすれば、バイリンガルと言えるだろうか？次節では、言語能力の側面とその測定方法について概観する。

1.2. バイリンガリズムとは

バイリンガリズムとは、いわゆる二言語併用のことだが、その二言語併用というのは「動的な過程」(dynamic process) をいうのであって、「静的な属性」(static attribution) をいうのではない (Yamamoto, 1987)。従って、バイリンガルであることは、将来でもバイリンガルであることは限らない。バイリンガルであることは流動的な属性を持ち、比較的不安定であり、また可逆性を持つ状態である。バイリンガリズムは言語環境における様々な要因の影響を受け変化する可変的言語経験である。

1.3. 言語能力について

Cummins (1980) は言語能力には二つの側面があると述べている。一つは、「認知的・学習的言語能力」(cognitive/academic language proficiency, CALP) と呼ばれるもので、いわゆる学校などの学習場面で培われる知識としての言語能力のことを言い、もう一つは、人とのコミュニケーションに関する基本的な技能 (basic interpersonal communication skill, BICS) と呼ばれる、日常生活の場面で人との会話を自然に行えるといった種類の言語能力のことをいう。要するに、学習言語能力と生活言語能力である。

言語間による読み書き能力の転移は認知・学習言語能力であり、そして現実に学校で問題になっているのは学習言語能力である (Cummins, 1983)。実際、日本の子どもたちが小学校、中学校で身につける語彙の数は約2万5千語にも達するといわれている。また日本に住む外国人が基本的な文法と2, 3千語の日本語語彙を知っていれば、後は慣れで非常に流暢な日本語を話すことができる。しかし、留学生に日本語の語彙力テストを実施してみると、意外なことに日本人なら子どもでも知っているような語彙を知らないことに気づくと小野 (1989) は述べている。

家族と共に外国生活を始め、学校で学ぶ子どもには、数年経つとその国の言葉を流暢に話せるようになるケースが多く見られる。生活の場でその状況を見て、外国語を上手に習得したと喜ぶ親は少なくない。この場合は、客観的な言語能力を測定してみなければ、子どもにとって必要な年齢相当レベルの学習言語能力が身に付いているかどうかは不明である。日本語でも外国語でも、数ヶ月から数年程度で大抵の意思の疎通が可能になることは事実であるが、こうした生活言語能力と、学校の授業を理解し学習場面で役立つような、その子どもの学齢に近い「読み、書き」能力

が求められる学習言語能力との間には大きな違いがある。なお学習言語能力が学年相応のレベルに達するか否かはそのように測定できるのだろうか。

国際交流基金及び財団法人日本国際教育協会は、外務・文部科学省両省の援助を得て、1984年に外国人能力試験実施委員会を設置した。その外国人日本語能力試験は聴解、文法・読解、文字・語彙の三種のテストによって構成される。海外では、アメリカ合衆国の日本語テストとして、Japanese Proficiency Test (JPT), Educational Testing Service (ETS) が挙げられる。これは英語話者のための日本語力テストで、現在「標準化」の過程を経たと言われる唯一のテストである(石田, 1992)。

ほかに、平均の母語話者の単語数を数量化することで語彙習得の指標とするテスト (D'Anna, Zechmeister, & Hall, 1991; Goulden, Nation, & Read, 1990) や、非母語話者が知るべき単語の数で語彙力を測定した手法がある (Hazenberg & Hulstijn, 1996; Laufer, 1992)。

1.4. 問題点の指摘

中国語と日本語の二言語併用について考える際、二言語能力を把握するのが最優先である。中日二言語能力の測定について、以下の点で検討の余地があると考えられる。

第一に、標準化された客観的な尺度の中国語と日本語のテストが必要である。各問題の平均正答率や標準偏差を算出し、標準的な尺度を構成する必要がある。従来の外国人日本語能力試験は主に日本の大学入学のため参考資料に使われる。それは受験者がテストの点数でどの学年のレベルに相当するかが分からない。Lyle F. Bachman (1990) は言語能力を測定する際、項目反応理論 (item response theory: IRT) が受験者の能力水準とテスト項目の特性 (難易度、弁別力) の両方を評価するために有効な測定方法の理論であると述べている。例えば、実際の日本語能力が不明な日本語学習者や帰国子女に日本語能力を評価しようとする際、その生徒が中学生であっても、実際の言語能力が小学生レベルであるか中学生レベルであるかを測定できる方法である。同じ手法を用いて、中国語、日本語能力のテストを検討し、開発することが必要であろう。

第二に、被験者の負担を低減し、簡易に言語能力を測定できる方法を検討する必要がある。発音の誤りがあっても、それは前後関係から理解できるが、語彙レベルでの誤りの場合には伝達に大きな障害になる (Tanaka, 1983)。読みの個人差に対しては、統語処理に関わる能力よりも語彙能力の個人差による影響が大きい (Laufer, 1997)。更に、語彙力が言語能力を代表できると述べている (Hatch, 1983; Lupescu & Day, 1993; Gass, 1988; Laufer, 1997; 小野ら, 1988)。先行研究では、語彙の数で言語能力を評価する場合、問題数の多さから生じる被験者への負担の大きさや再生の手続きの冗長によって、回答意欲が低下する恐れがあると考えられる。したがって、被験者の能力を反映できる、かつ効率よく負担がかからない中国語と日本語の言語能力の測定法を開発する必要がある。

以上、二言語併用についての特徴とその二言語能力を把握する際、どのような測定法が望ましいかについて概観してきた。二言語併用は言語環境における様々な要因が関連していると考えられる。そこで、次節では、二言語習得に関わる要因を検討した先行研究を概観し、その問題点を考察する。

2. 二言語習得に関わる要因

箕浦 (1981) は海外在住の日本人子女を対象に英語の獲得、日本語の保持の関連要因を明らかにするために、横断的に面接調査を実施し、英語力の自己評価、アメリカ人との交友密度などの社会的要因や年齢、滞在年数などの要因がどれくらい関わっているかを分析した。その結果は社会的要因より英語圏に入った年齢や滞在年数のほうが子どもの発達に関する要因が大きく関わっていた。また、岩崎 (1982) は、子どもたちの英語力に最も寄与する要因は現地校にいる期間、日本語の維持にはきょうだいの数であると述べている。

バイリンガルを育てるには、社会環境、家庭環境、学校教育環境といったいろいろな条件が複雑に絡んでくる。二言語習得についての影響に関連する要因を検討した先行研究は、学習開始年齢、滞在年数、そして態度、動機や学習形態などの部分的な検討が多くて、この様々な要因を網羅し、多角的に検討したものが少ない。

2.1. 年齢との関連

第二言語習得の開始年齢が低いほど習得が良いと示唆される先行研究と、それに反する先行研究を概観する。例えば、Johnson & Newport (1989) は、渡航年齢が第二言語の達成度に影響を与えていると示唆している。それは、言語学習において、子どもの制限された情報処理能力が有利という見解からである (Newport, 1990)。また、発音の面に関して、北村 (1952) は、発音の異なる方言への同化に年齢要因が強く関連していると示している。

一方で、内田 (1997, 1999) は、カリフォルニア州の幼稚園児、小学生の言語獲得過程についての調査と文化への適応過程の短期縦断観察を行った結果、幼稚園に入園した異言語の子ども同士の言語による相互交渉は10ヶ月が経ってもほとんど起こらなかったという。年齢が低いほうが第二言語を学習しやすいという見解も支持されなかった。また、入国年齢が高い方が第二言語の習得においても有利であり (Cummins & 中島, 1985)、第二言語習得において幼いほど第二言語を習得するのに有利であると考えられてきたことに対する疑義が唱えられている (McLaurghlin, 1984, 1985)。Snow & Hoefnagel-Höhle (1982) は、アメリカの3～5歳児、8～10歳児、12～15歳児のオランダ語の習得度を調べたところ、12～15歳児が最も早く、3～5歳児が最も遅いという結果を得、低年齢のほうが習得に有利であるというのを支持できないとしている。そして、海外在住の日本人子女を対象とした日本語保持と第二言語の学習の調査の研究では、子どもの現地に滞在する年数は年齢と密接に関連しながら、言語習得に影響する。渡航年齢が高いほうが第二言語の習得に有利といった見解もある (e.g., Ellis, 1991; 小野, 1989)。

2.2. 言語環境との関連

Harly & Wang (1997) は、大人であっても、発音の学習能力が減衰するとはかぎらないことを見出している。第二言語に曝される環境の違いが学習の容易さに影響を与えると指摘している。また、年齢が若い方が常に有利であるといった考え方は立証できない。決定要因は、年齢よりむしろ、習得環境である (Singleton, 1995; Romaine, 1995)。そして、北村 (1952) は、発音の異なる方言への同化に両親の出身地が影響することから、言語環境の重要性を指摘している。第二言語習得の過程には、学習目的、年齢以外にも、動機、態度、性格といった学習者要因や学習者を取り巻く社会文化的要因など数多くの要因が複雑にかかわっている (Yorio, 1976; Brown, 1994)。しかし、どのような要因がかかわっているのか、あるいはかかわる可能性があるのか、また要因間にどのような相互作用があるのか、といったことを十分に検討されてきたとは言えない。

2.3. 言語体系との関連

二言語相互依存説によると、読み書きの能力の言語間での転移がおこる (Cummins, 1983)。また、誤りが二言語間の差異の度合いと関係している。二つの言語体系が違うと、その習得過程も変わる。一体、二つの言語はどのように影響しあうかについて先行研究を概観する。

内田 (1999) は、第二言語学習者の幼児は複数形の脱落は顕著であることから、母語の文法が干渉しているものと推測される。母語と第二言語のルールの類似性や学習環境によって、干渉の程度は変わる可能性がある (McLaurghlin, 1984, 1985)。大島 (1993) は、中国語と韓国語話者の日本語推量表現の学習状況について、質問紙調査を行った。その結果、韓国語話者には学習が進むにつれ次第に日本人の選択結果に近づく傾向が観察されたが、中国語話者には同じ傾向が見られなかった。しかも、韓国人の学習年数の少ないグループは中国人の学習年数の多いグループよりも日本人の結果に近かった。これは母語の転移が推量表現の学習に関わっていることに原因があると説明している。つまり、韓国語の推量表現が中国語に比べ、日本語のそれにより近いことに起因するという。母語による影響の例として、漢字の書き方テストで漢字系学習者の結果には高い相関が認められ、また同じレベルにあると思われる英語、中国語、韓国語を使用している日本語学習者に日本語学力の分析をしたところ、自・他動詞の使い分けと助詞との関連は中国語群にしか見られなかったという知見 (石田, 1986) がある。母語の影響を自国語の構造から考えてみると、中国語に見られない自・他動詞の使い分けと助詞は、日本語を学習する中国語話者にとって、難しいものの一つであることが分かる。

しかし、母語による影響は必ずしも正の影響を与えるとは限らない。例えば、菱沼 (1981) は、漢字の共有は有利でありながら、誤った類推 (一般化) が生じる危険が常に伴う。同形語は学習者の誤りを招きやすい。このような誤りは表記の同一、意味の類似という条件下で起こる語彙面の言語干渉を示唆している。

2.4. 問題点の指摘

二言語習得に関わる要因に関するこれらの先行研究には、以下の点で検討の余地があると考えられる。

第一に、第二言語習得で一番議論を呼んでいるのは、第二言語を学習する年齢と習熟に成功することとの関係である。しかし、年齢が低いほうが習得に良いとそれに反する見解が分岐している。それは測定法（手法）が様々で、十分な証拠がないことから、一致した見解が得られない。例えば、文法の聞き取りテストだけを測定している研究では、第二言語の形態素や統語規則は、年齢が低い者ほど、獲得が容易であったとの知見（Johnson & Newport, 1989; 北村, 1952）がある。文法力や語彙力のテストを用いる研究では、年齢が高い者ほど、第二言語を習得しえる（小野, 1989）。したがって、第二言語の習得過程を言語産出の面から検討し、語彙や文法、読解のテストで統語規則を測定することが重要であろう。

第二に、第二言語学習者を取り巻く言語環境について詳細に調べる必要がある。例えば、授業形態、動機、言語使用の頻度、日常生活、性格、アイデンティティ、親の教育歴や経済状況などを少し丁寧に検討していくことによって、第二言語学習者の習得が個別であることへの理解が深められるのではないだろうか。子どもの2つの言語の発達について研究すると同時に、子どもが言語を習得する際の社会的な背景を検討することも重要である。

第三に、二つの言語の各側面を詳細に調べる必要がある。Yokosawa & Umeda (1988)によると、日本語の辞書の約70%は漢字二字で構成されている。語彙の点から、中国語と日本語の距離が近いと思われる。しかし、二言語は語順や声調、動詞、成語、及び主語、目的語を示すための助詞の使用などから見ると、構造が非常に違っている。言語体系が違くと、バイリンガリズムも変わる点から、中日二言語の共通、差異の部分を語彙、文法などの側面から調べるべきである。

3. 縦断的研究

第二言語習得とは流動的で、ダイナミックな属性を持っており、可変的言語経験であることから、二言語の習得過程を観察し、そうした習得過程の実際を提示することは様々な習得過程に関する理論を検討する上で必然的な研究であろう。しかし、これまでの研究では、短期間での習得度を問題としており、記憶力や認知能力の優れた年長児が好成績をあげるのは当然と言えよう。

3.1. 先行研究

特定の学習者を長期的に観察した縦断研究としては、フランス語話者が1年間日本語を学習した場合、どれだけのことが習得できるものなのかの研究（石田, 1991）、英語を母語とする2名の日本語初級学習者を対象に、1年10ヶ月に渡り、格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について分析した研究（久保田, 1994）、また日本語の否定形の発達順序の6ヶ月の縦断的調査（家村, 2001）があげられるが、その数はまだ少ない。特に個々の学習者の語彙や文法などの習得に関し、長期的に研究したものが極めて少ない。英語習得過程についての縦断的研究に、Hakuta (1976)の5歳児の追跡調査の研究があるが、この研究の追跡期間がわずか1年と短かく、年齢相当のレベルに達しないうちに研究が打ち切られている。

3.2. 問題点の指摘

二言語習得に関する研究は、習得過程の解明の上で重要な見解を提示しているが、いずれも横断的な調査によるものであり、個々の学習者の習得過程の実際を提示するものではない。特定の学習者の習得過程を長期的、そして詳細に調べることに意義があり、縦断的に個人個人の文法規則内における言語変化の型と影響要因の関係を検討する必要がある。

4. 今後の方向性

本論文では、二言語習得に関する研究を概観してきた。以上を総括してみると、中日二言語の習得過程について今後の研究の展開の方向性について、以下のようなことを挙げるができるであろう。

第一に、中日二言語習得過程を把握するため、まず標準化された客観的な尺度の中国語と日本語の検査が必要である。先行研究の多くは、テストそのものに関する研究よりも、それらのテストを使用して測定された日本語力の分析についての報告が多くなされてきた。また、学年レベルに達するか否かを弁別するような中国語力のテストがないため、客観的な指標の開発が必要であろう。

第二に、中日二言語の習得に関して何が大事なのか、またどのような段階でどのような習得や関与要因が見られるのか、そしてどこで誤りを犯しやすいのかについて詳細に検討する必要がある。また、子どもの2つの言語の発達について研究すると同時に、子どもが言語を習得する際の社会的な背景を調査し、総合的に検討することも重要である。

第三に、中日二言語の習得についてより長期的な追跡調査を行い、個々の学習者の習得過程の実際を提示し、詳細な検討が必要であろう。

今後、中日二言語のバイリンガリズムについて、これらの観点を含むより詳細な検討、分析によって、より解明できると考える。また、二言語習得のメカニズムを解明するのが社会的・教育的・個人的観点から重要であろう。

文 献

- Bialystok, E. (1984). Influences of bilingualism on metalinguistic development. Paper presented at the symposium 'Language awareness/reading development: Cause? Effect? Concomitance?' at the National Reading Conference Meeting, St. Petersburg, Florida.
- Bialystok, E. & Ryan, E. B. (1985). Metacognitive framework for the development of first and second language skills. In D. L. MacKinnon and T.G. Waller (Eds.), *Meta-Cognition, Cognition, and Human Performance*. Academic Press.
- Bloomfield, L., (1933). *Language*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Brown, H. D. (1994). *Principles of Language Learning and Teaching* (3rd Ed.). Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall Regents.
- Cummins, J. (1978a). Bilingualism and the development of metalinguistic awareness. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 9, 139-149.
- Cummins, J. (1978b). Metalinguistic development of children in bilingual education programs: Data from Irish and Canadian (Ukrainian-English) programs. In M. Paradis (Ed.), *Aspects of Bilingualism*. Columbia, SC: Hornbeam Press.
- Cummins, J. (1980). The Cross-lingual dimensions of language proficiency: implications for bilingual education and the optimal age issue. *TESOL Quarterly*, 14, 2, 175-188.
- Cummins, J. (1983). *Heritage Language Education: A literature review*. Toronto: Ontario Ministry of Education.
- Cummins, J. & 中島和子 (1985). 「トロント補習校小学生の二言語の構造」『バイリンガル・バイカルチュラル教育の現状と課題』東京学芸大学海外子女教育センター 143-179.
- 大学入試センター研究開発部 (1995). 外国人子女教育のための資料便覧. 第三版.
- D'Anna, C. A., Zechmeister, E. B., & Hall, J.W. (1991). Toward a meaningful definition of vocabulary size. *Journal of Reading Behavior*, 23, 109-122.
- Ellis, R. (1985). *Understanding Second Language Acquisition*, Oxford University Press.
- Foss, D. J. & Hakes, D. T. (1978). *Psycholinguistics*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Gass, S. M. (1988). Second language vocabulary acquisition. *Annual Review of Applied Linguistics*, 9, 92-106.
- Goulden, R., Nation, P., & Read, J. (1990). How large can a receptive vocabulary be? *Applied Linguistics*, 11, 341-363.
- Grosjean, F., (1982). *Life with Two Languages*. Harvard University Press.
- Hakuta, K. (1976). A case study of a Japanese child learning English as a second language, *Language learning*, 26, 321-351.
- Hakuta, K. (1986). *Mirror of Language: The Debate on Bilingualism*. New York: Basic Books.
- Harley, B. & Wang, W. (1997). The critical period hypothesis: Where are we now? In A. M. B. de Groot (Ed.), *Tutorials in Bilingualism*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Hatch, E. M. (1983). *Psycholinguistics: a second language perspective*. Rowley, MA: Newbury House.
- Haugen, E. (1953). *The Norwegian Language in America: A study in bilingual behavior*. University of Pennsylvania Press.
- Hazenbergh, S., & Hulstijn, J. H. (1996). Defining a minimal receptive second language vocabulary for non-native university students: An empirical investigation. *Applied Linguistics*, 17, 145-163.
- 菱沼透 (1981). 中国語と日本語の言語干渉—中国人学習者の誤用例—, *日本語教育*, 42, 58-72.
- 石田敏子 (1986). 英語・中国語・韓国語圏別日本語学力の分析. *日本語教育*, 58, 162-175.
- 石田敏子 (1991). フランス語話者の日本語習得過程. *日本語教育*, 75, 64-77.
- 石田敏子 (1992). 入門日本語テスト法. 東京: 大修館書店.
- 岩崎真理子 (1982). ニューヨーク居住日本人子女にみるバイリンガリズム—その読解力に関する一研究—. *東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要*, 1, 49-63.
- Jhonson, J. S. & Newport, E. L. (1989). Critical period effects in second language learning: The influence of maturational state on the acquisition of English as a second language. *Cognitive Psychology*, 21, 60-99.
- 北村甫 (1952). 子どもの言葉は移住によってどう変わるか. *言語生活*, 8, 15-20.
- 久保田美子 (1994). 第2言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—. *日本語教育*, 82, 72-85.
- Laufer, B. (1992). Reading in a foreign language: How does L2 lexical knowledge interact with the reader's general academic ability? *Journal of Research in Reading*, 15, 95-103.

- Laufer, B. (1997) . What's in a word that makes it hard or easy: Some intralexical factors that affect the learning of words. In N. Schmitt & M. McCarthy (Eds.) , *Vocabulary: Description, acquisition, and pedagogy* (pp.140-155) . Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Lupescu, S. and Day, R. R. (1993) . Reading, dictionary, and vocabulary learning. *Language learning*, 43, 263-287.
- Lyle F. Bachman (1990) . *Fundamental Considerations in Language Testing*.
- Mackey, W. F. (1962) . The Description of Bilingualism. *Canadian Journal of Linguistics*, 7, 51-58.
- McLaughlin, B. (1978) . *Second-language acquisition in childhood*. Lawrence Erlbaum Associates, Pub.
- McLaughlin, B. (1984) . *Second-Language acquisition in childhood: Vol.1. Preschool Children, Second edition, Hillsdale, NJ: Erlbaum*.
- McLaughlin, B. (1985) . *Second-Language acquisition in childhood: Vol.1. School-Age Children, Second edition, Hillsdale, NJ: Erlbaum*.
- 箕浦康子 (1981) . バイリンガリズムの形成過程とその関与因—在米日本人児童の場合—. *岡山大学文学部紀要*, 2, 75-86.
- 村田孝次 (1968) . *幼児の言語発達*, 東京: 培風館.
- Newport, E. L. (1990) . Maturation constraints on language learning. *Cognitive Science*, 14, 11-28.
- Oller, J. W. and Perkins, K. (1978) . A further comment of language proficiency as a source of variance in certain affective measures. *Language Learning*, 28, 417-423.
- 小野博他 (1988) . 海外帰国子女の大学生における日本語, 英語語彙力. *東京学芸大学特殊教育研究施設報告*, 37, 1-8.
- 小野博 (1989) . 海外帰国児童・生徒の英語と日本語語彙力の変化. *異文化間教育*, 3, 35-51.
- 小野博他 (1989) . 日本語力検査の開発. *文部省科学研究費報告書*, 1-116.
- 大島弥生 (1993) . 中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究. *日本語教育*, 81, 93-103.
- Romaine, S. (1995) . *Bilingualism*. Oxford: Basil Blackwell.
- Singleton, D., & Lengyel, Z. (1995) . The age factor in second language acquisition: A critical look at the critical period hypothesis. Clevedon: Multilingual Matters.
- Snow, C. and Hoefnagel-Höhle, M. (1982) . "The critical period for language acquisition: evidence from second language learning." In Krashen, S. D., Scarcella, R. C. and Long, M. H. (Eds.) , *Child-Adult Differences in Second Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House publishers, Inc., pp.93-112.
- Tanaka, S. (1983) . Language transfer as a constraint on a lexico-semantic development in adults learning a second language in acquisition-poor environments. Ph. D. dissertation, Teachers College, Columbia University.
- 内田伸子 (1997) . 第二言語学習に及ぼす成熟的制約の影響—第二言語としての英語習得の過程. *日本語学*, 10, 33-43.
- 内田伸子 (1999) . 第二言語習得における成熟的制約—子どもの英語習得の過程—. 桐谷滋 (編) *ことばの獲得*, 京都: ミネルヴァ書房 (pp. 195-228) .
- Weinreich, Uriel (1953) . *Languages in Contact*. The Hague: Mouton.
- Yamamoto, M. (1987) . Significant Factors for Raising Children Bilingually in Japan. *The Language Teacher*, 11 (10) , 17-23.
- 家村伸子 (2001) . 日本語の否定形の習得—中国語母語話者に対する縦断的な発話調査に基づいて—. *第二言語としての日本語の習得研究*, 4, 63-81.
- Yorio, C. (1976) . Discussion of Explaining Sequence and Variation in Second Language Acquisition. *Language Learning*, Special Issue, 4, 59-63.
- Yokosawa, K., & Umeda, M. (1988) . Processes in human knaji-word recognition. Proceedings of the 1988 IEEE international conference on systems, man, cybernetics. 377-380
- 吉岡薫 (1999) . 第二言語としての日本語習得研究—現状と課題—. *日本語教育*, 100, 19-32

Review about the second language acquisition

— With Particular Reference to Chinese and Japanese —

LEE Mei-Chin

This thesis primarily reviews the conventional literature of two language acquisition in the cases of Chinese and Japanese languages. Practically, it aims at suggesting the course of the future study including influential factors to learn Chinese and Japanese. In the first, as regards most of the preceding research about the way of measuring language ability, more reports which research-rather than the tests themselves-the ability of Japanese language measured by using these tests have been made. In the second, this thesis reviews the preceding study what is important to learning of two languages, what kind of learning and participation factors are seen at which stages, and where mistakes are often committed. In addition, it is also important to investigate and synthetically examine the social backgrounds and linguistic ambiance where a child learns a language as well as to study the two language development of child. In the third, it is necessary to make the detailed consideration by undertaking more long-term follow-up surveys on learning of Chinese and Japanese languages, and by offering empirical accounts for each learner's learning process.

Key words : Chinese, Japanese, the second language acquisition, long-term research